若越郷土研究
41の4

鯖屋誠照寺・中野専照寺の成立(上)

小泉義博

はじめに

越前に親鸞系の念仏が展開するに当たり、とくに重要な位置を占めたのが如道（如導とも）の創建にかかる大町専修寺である。その成立は鎌倉末期に遡り、やがてここからいわゆる三門徒派の寺院、すなわち横越証誠寺・中野専照寺・鯖屋上野誠照寺が離脱してくることとなるのである。

筆者はすでに「大町専修寺の歴史」[1]をまとめ、大町専修寺の創立から没落に至る経緯、および蓮慶によって復興された後に加賀諸江へ転じ、さらに戦国末期に三国に移転して勝授寺と改号する状況を検討することができた。続いて「横越証誠寺の成立と出雲路毫摂寺」[2]では、南北朝期に大町専修寺から離脱する横越証誠寺と、室町期になってこの証誠寺を兼任することとなる出雲路毫摂寺に関して、子細に検討を加えることができた。

そこで本稿ではこれらの分析に続き、室町期に至って横越証誠寺から離脱する鯖屋上野誠照寺についてと、永享年間に大町専修寺が本願寺から破門されたことに対応して、専修寺から離脱する中野

図1　中野専照寺・鯖屋誠照寺の歴代住持

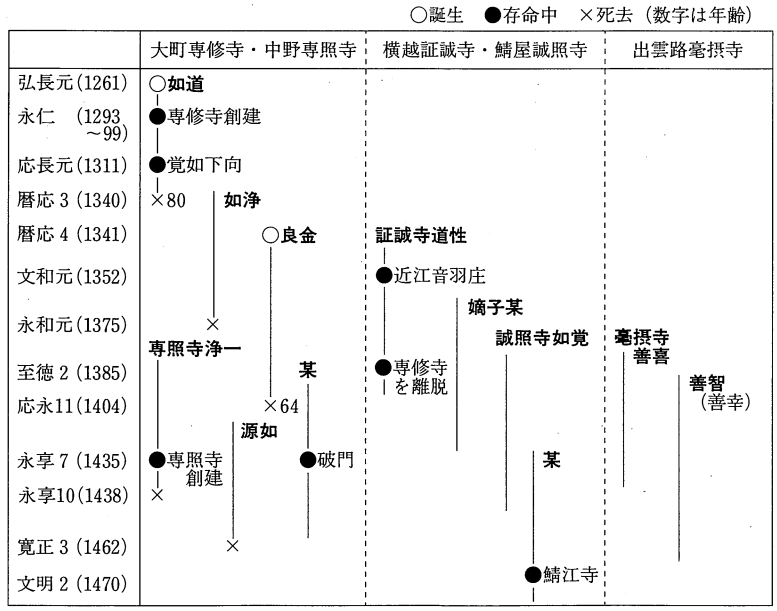
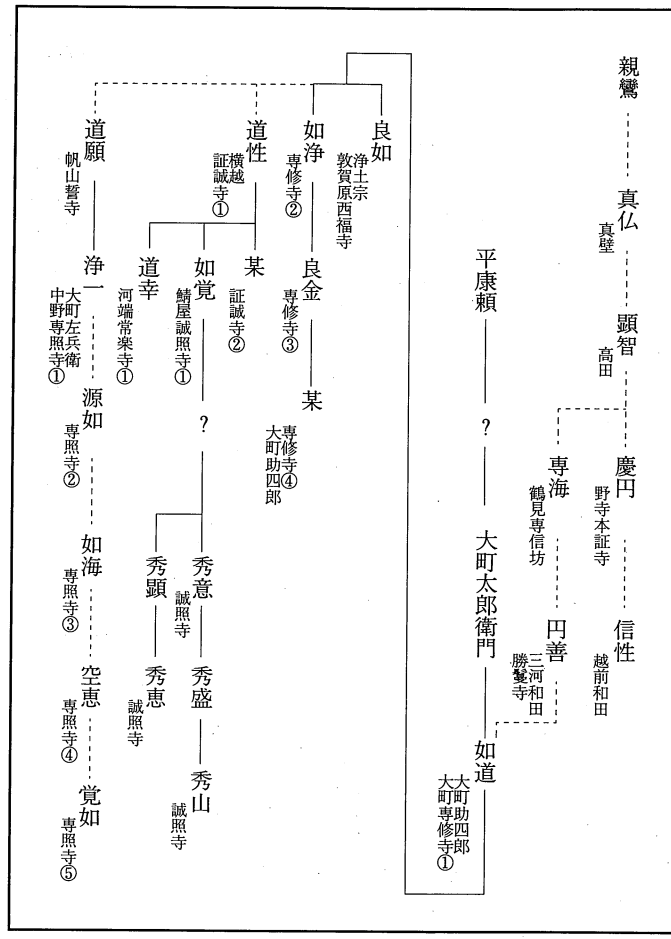


図2　越前三門徒派の系譜



専照寺について、検討を加えてみようとするものである。

一　道性と横越証誠寺

鯖屋上野誠照寺は横越証誠寺から分立する寺院なので、本節ではまずその前提として、大町専修寺から横越証誠寺道性が離脱するまでの経緯を振り返っておくこととしたい。

大町専修寺の開基如道は、平判官康頼の子孫と思しき大町太郎衛門の子と伝えられ、弘長元年（一二六一）に誕生して俗名を大町助四郎と称した。長じて彼は三河和田円善（のち勝鬘寺）の弟子として出家し、永仁年間（一二九三～九九）に専修寺を創建した。やがて越前で彼は大きな影響力を持つに至ったので、本願寺覚如が応長元年（一三一一）に彼のもとに下向してしばらく滞在し、ついに彼を門徒として帰属させることに成功したのである。彼は暦応三年（一三四〇）まで存命し、八〇歳の生涯を終えた。

如道の跡は、その二男如浄によって継承された。これは長男良如が浄土宗に属して、敦賀原に西福寺を創建していたためである。と

ころが第二世如浄もやがて浄土宗小坂義に傾いたため、門徒衆から康安二年（一三六二）に厳しい批判の言上状を突き付けられ、やむなく彼は起請文を作成して一向専修念仏に復帰したのであった。この批判の先頭に立ったのが道性（のち横越証誠寺開基）と思われ、如浄のかかる浄土宗傾倒を評して、『反古裏書』[3]は秘事法門と呼んでいるのであろう。かくして如浄は永和元年（一三七五）に至って死去する。

続いて如浄の子良金（了泉と記す史料[4]もあるので、本来は「良全」と書いてリョウゼンと発音されたものであろう）が第三世を相続するが、彼も至徳二年（一三八五）頃に著しく浄土宗に傾いたらしい。その結果、道性をはじめとする門徒衆はついに専修寺から離脱することに決し、新たに横越に証誠寺を創建して転ずるに至った。そして専修寺に代わるべき本寺（手次寺）としては出雲路毫摂寺を選んだのである。なお良金は応永十一年（一四〇四）に六四歳で死去する。

大町専修寺のもとを離脱した道性は、やがて老齢に及んで証誠寺を嫡子某に継承させ、「道性、老後ニ山本村ニ隠居仕、山本寺ト申候」（『中野物語』）[5]と、みずからは山本村（山本庄水落村）に隠居した。証誠寺の山号「山元山」は、この道性隠居所に因んで付けられたものであろう。

二　如覚と鯖屋上野誠照寺

道性には三人の男子があったので、嫡子某が証誠寺を継承し、三男道幸は河端に常楽寺を建立していたが、二男如覚だけはひとり不遇の立場にあった。

一、河端村常楽寺と申御座候。是ハ道性三男御座候内、嫡子ハ証誠寺、二男如覚ハ道性と不和ニ御座候而、家□□池田之内ニ蟄居仕候。三男道幸ハ河端村ニ寺建立、出仕罷有候。道性及終梟之時、如覚義を佗言仕、臨終之砌ニ漸致対面候よし。没後ニ道幸取持ニテ、鯖江（鯖屋カ）ニ一宇建立、誠証（照カ）寺と申て、道幸より相続、代々尊敬いたし、万端之義差図ハ河端常楽寺仕、旦方用事等之義、常楽寺差引次第ニ仕候処、程過、年歴遠く罷成、鯖江ノ秀意代・秀恵代より常楽寺と不和ニ成、秀山一代ハ不通ニて、相互ニ出入取結、秀誠代ニ罷成候…（中略）…寛永之末頃…（中略）…常楽寺ハ敦賀之山中ヘ罷越、寺法物ハ鯖江ヘ取申候。只今之誠証寺御開山ハ、常楽寺没落之時之御木像ニて御座候。寺地、今に鯖江（ママ）より支配仕候。文明弐年ニ鯖江寺建立仕候由…（下略）

（『中野物語』）

右の『中野物語』によると、二男如覚は父道性と不和になって池田に蟄居を余儀なくされていたと見えている。しかし彼は弟道幸の執り成しで、臨終の間際になってようやくに父との対面を許され、その没後に同じく道幸の差配で「鯖江」（鯖屋か）に誠照寺を建立して、ここに入寺したのである。当初は万端を河端常楽寺が取り仕切っていたが、しかし秀意・秀恵の時代から常楽寺とは不和になったため、秀山一代は全くの不通であった。秀誠時代の寛永末年に、常楽寺が退転して敦賀に没落した時、その法物類を誠照寺が保管したので、その結果、常楽寺にあった親鸞木像がそのまま誠証寺に帰属することになった。なお「鯖江寺」の建立は文明二年（一四七

〇）のことであった、と述べられているのである。

右の記事では誠照寺創建がいつのことか判然としないが、父道性の死後と明記されているから、まず道性の没年を推定してみよう。道性の史料上の初見は貞和二年（一三四六）で、彼はこの時に京都で修学中であった。おそらくは出家してまもなくの十五歳頃のことと考えられ、彼の年齢をこれよりも若くに想定することは困難であろう。とすれば、誕生は正慶元年（一三三二）頃、また大町専修寺を離れた至徳二年（一三八五）には五四歳程度であったと思われる。そしてもし彼が、六〇歳まで存命したとすれば明徳二年（一三九一）頃、八〇歳の長寿に達したとすれば応永十八年（一四一一）頃に死去したということになるであろう。以上を踏まえれば、父道性が応永年間の前半に死去したことはほぼ確実であるから、鯖屋上野誠照寺の創建はそれよりやや遅れて、応永中期頃であったと推測してよいであろう。

三　如覚の居住地「鯖屋」

そこで次に、誠照寺の創建を語るいま一つの史料として、『異本反古裏書』の一節を取り上げてみよう。

如道（如浄カ）新義をたて、秘事法門と言事を骨張せしかハ、御門徒の面々かたく糺明をなし、自今以後出言あるへからさる旨、起請文をかゝしめ、改悔ありしかとも、猶やますして諸人迷乱ありしかハ、申上られ、御門徒をはなされ畢。しかれとも邪義をつのり、横越の道性、鯖屋の如覚、中野坊主、此旨をつたへ、いまニ餘残ありて、おかますの衆と号する者也。又鯖屋ハ、三門徒のそて也。如覚ハ、〇存覚（常楽台）上人の御在世の御時よりの御門弟也。其以後、邪義の骨張と成給ひき。しかれ共、今少路（常楽寺）蓮覚上人御時、帰参ありき。しかる所に□伊賀法橋、無所存によりて、又秘事ニ立ちかへり給ひき。いまのかわ野の成照寺是也。しかれハ、蓮如吉崎御在津の時より、大略心中をあらためき、本寺へ帰参せしむ。⑥

これによると、「如道」（正しくは如浄）が新義を立てて秘事法門を骨張したので、門徒の面々が康安二年（一三六二）に厳重に糺明を行い、今後は出言しない旨の起請文を書いて改悔したので、一旦は落着した。しかしその後、第三世良金に至っても一向にやまず、至徳二年（一三八五）の道性の申状も効果がなかったので、道性はついに離脱に及んだ。そして第四世某の時代になって、こうした状況を本願寺に申し上げたところ、ついに永享七年（一四三五）に「御門徒をはなされ畢」と、専修寺は破門されるに至ったのである。しかしその後も邪義を募って、横越の道性・鯖屋の如覚・中野坊主らがこの旨を伝えて、現在も余残が「おかますの衆」と号している。ところで鯖屋は三門徒派の「そて」＝分派であって、開基如覚は常楽台存覚の時代からの門弟であるが、後に邪義を骨張するようになった。そして「今少路」＝常楽寺蓮覚の時には帰参するに至ったが、「伊賀法橋」はまたもや秘事に立ち返ってしまい、現在の「かわ野の成照寺」につながっている。けれども蓮如の吉崎在津の時代に、おおむね心中を改めて本願寺に帰参するに至った、と語られているのである。

右のうちで注目すべきは、如覚の居住地が

「鯖屋」と記されている点、次いで如覚が常楽台存覚の門弟とされている点、そして常楽寺蓮覚時代に一旦帰参し、その後再び秘事法門に立ち返ったが、蓮如の吉崎滞在時代に帰参したとされている点である。

まず第一の、如覚居住地が「鯖屋」と記される点を検討しよう。これは大覚寺領鯖屋庄のことであって、戦国期には白鬼女村と呼ばれ、江戸期に上鯖江村と改称され、現在は舟津町一丁目～五丁目と変更されている地域である。そしてこのうちの舟津町二丁目に小字「上野（ウワノ）」が所在しているから、⑦この近辺こそが誠照寺の故地であり、その山号「上野山」の発祥地としなければならない。他方、前節引用の『中野物語』では所在地が「鯖江」と記されていたが、しかし鯖江に「上野」なる小字名は所在しない。つまり当初から鯖江に誠照寺が所在したと考えた場合には、山号の由来が説明できなくなってしまうのである。かくして、誠照寺の最初の建立地は、大覚寺領鯖屋庄（近世の上鯖江村）の小字「上野」であったとすべきであり、これが後に「鯖江」（二条家領鯖江庄下深江村の現在地）に移転したと考えられるのである。

なお寺伝によると、誠照寺の故地は現在の惜陰小学校校庭の南西端あたりであったとされる。ここは小字「上野」のごく近くで、この付近一帯がかつて「上野」と呼ばれていたと考えてもなんら不自然ではない。なお、ここからやや南方の地点に、「車ノ道場」と通称される上野別堂が所在するが、ここを故地とみなすことはできないようである。

四　誠照寺と常楽寺

前節に続いて、『異本反古裏書』における注目点の第二、すなわち開基如覚が常楽台（常楽寺）存覚の門弟とされていることについて検討しよう。

存覚とは本願寺覚如の嫡子で、当初は彼が本願寺の後継者と目されていたが、父覚如と対立した結果、廃嫡されてしまい、代わって弟従覚が本願寺を継承することとなったのである。「日野一流系図」によれば、

光玄　童名光日、童体之時従五以下。俗名親綱。彼特前伯耆守親顕子也。
号常楽台。法印権大僧都、大納言。
法名存覚、元尊―。本名光願、又改―顕、又――、又号改―禅。
母。…（中略）…
応安六癸巳、二月廿八日入滅、八十四歳。⑧

とあって、存覚は応安六年（一三七三）まで存命して八四歳で死去したとされるから（誕生は正安三年＝一二九〇であろう）、如覚が存覚の弟子となるためには、応安六年以前に帰依していなければならない。

ところで先に、道性の生涯を推測して正慶元年（一三三二）頃の誕生と考えたが、これを踏まえて如覚の生涯も推測してみよう。もし二男如覚が、道性二五歳頃に誕生していたと仮定できるならば、如覚は延文元年（一三五六）頃の誕生であり、さらに十五歳で得度したとすれば応安三年（一三七〇）のことであったと計算される。つまり、以上の想定に基づけば、如覚は得度してから少なくとも三年間程度は、存覚から指導を受ける期間があったのである。とするならば、彼の法名に用いられている一字「覚」は、存覚から拝受した可能性が出てくるであろう。

なお、如覚が常楽台存覚に帰依していたのに対し、その父道性が出雲路亳摂寺に属していたことは、すでに第一節で述べたところである。この、帰属すべき本寺が如覚と父道性とで異なっていた点こそが、両人の不和の原因をなしていたのではあるまいか。そしてもしそうであったならば、如覚が池田（池田庄）に蟄居していたとの箇所も、必ずしも誇大に悲観視するには及ばず、単に父との交渉が途切れていたといった程度のものであろう。現在の今立郡池田町から大野郡にかけて、鯖屋上野誠照寺派に属する寺院がかなり多い理由は、この「蟄居」中の如覚による働き掛けの成果と考えるべきものではなかろうか。

最後に第三の注目点、草創されてまもなくに誠照寺は本寺常楽寺から一旦離れ、蓮覚時代になって再び帰参し、その後またもや秘事法門に立ち返ったが、蓮如時代に本願寺に帰参したと述べられる点を検討してみよう。

まず蓮覚について「大谷一流諸家系図一――常楽寺系図」を見てみると、

光信　常楽台、改常楽寺。依兼寿法印命。
但古与寺云。
中納言。法印権大僧都。
□元ハ法名蓮覚。
母――、法名覚智。籠居号証願寺。[9]

とあって、実名光信、法名蓮覚と称し、常楽台を改めて常楽寺と号したとされる。あいにくと生没年などが未詳であるが、蓮如の命により改称が行われたとされ、また法名蓮覚も蓮如から下付されたものであろうから、蓮如（応永二二年～明応八年、一四一五～一四九九）とはやや若い世代に属すと考えてよいであろう。

そこでこれを踏まえて、右の離脱・帰参の推移を捉え直してみよう。応永初年の草創後まもなくして、誠照寺は本寺常楽寺を一旦離れたとされていたが、これは常楽寺に代わるべき本寺（手次寺）を得たための行動にほかならない。そこで想起されるのが、横越証誠寺第二世某の死去の後に、その住持を、本寺たる出雲路亳摂寺の第三世善喜が兼務した事実である。[10]善喜は当然、頻繁に横越に下向するようになったから、鯖屋誠照寺が善喜のもとに帰属するのはむしろ当然と言えるかも知れない。なぜならば、そもそも誠照寺は横越証誠寺の派生だからである。かくして誠照寺は、次第に本寺常楽寺を離れることになったと考えられるのである。

次いで常楽寺蓮覚の時代になると、鯖屋誠照寺は再び常楽寺に帰参したものの、その後またもや秘事法門に立ち返り、蓮如時代に至って本願寺に帰参したとされる点を考えてみよう。この一連の経緯も、おそらくは亳摂寺住持との関係で生じた混乱であろう。とすれば、善喜が死去して善智（善幸とも）が亳摂寺を継承した時点で、誠照寺は一旦、亳摂寺を離れて常楽寺のもとに復帰したものであろう。しかるに善智は、やがて弟善秀に亳摂寺第五世を委ねて、みずからは越前横越に転じてしまうので、この時点で再び鯖屋誠照寺は常楽寺のもとを離れ、横越の善智に帰依することとしたのではなかろうか。善智のこの時の地位は証誠寺第四世であり、これを指して『反古裏書』は秘事法門と非難しているのであるから、本願寺によって手次寺と認定された亳摂寺・常楽寺などに帰依しない限りは、すべて秘事法門と評されていると考えねばなるまい。そして、文明三年（一四七一）に蓮

如が越前吉崎に下向するに至って、誠照寺は本願寺に帰属することとしたのである。

五　誠照寺の鯖江移転

すでに第三節で述べたように、誠照寺の最初の建立地は鯖屋庄上野であった。これが現在地の鯖江庄下深江村に転じたのは、『中野物語』に、

文明弐年ニ鯖江寺建立仕候由。

（『中野物語』）

と記されるごとくに、文明二年（一四七〇）のことであったと考えられる。

この理解に基づくならば、文明二年以前の年紀を持つ「誠照寺文書」第一号～第六号では、地名としては「鯖屋上野」しか登場しないはずである。しかし実際には「鯖江庄」と記されているから、この点によってこれらの文書の信頼度は大きく損なわれていると言わねばならない。[11] 当然、同一文書中の「真照寺」なる寺号にも疑問点が残るから、これを誠照寺の旧号と解する説は採用できないであろう。筆者は第一号～第六号をすべて偽文書と考えているが、仮に一歩譲って真照寺が実在したとしても、真照寺と誠照寺とが同一寺院であるかどうかの検討は不可欠である。両寺が同一と確認できない限りは、別個の寺院と理解するのが無難であろう。

信頼すべき史料が得られないために、下深江に転じて以後の誠照寺の動向は全く不明であるが、「鯖江ノ秀意代・秀恵代より常楽寺と不和ニ成、秀山一代ハ不通ニて、相互ニ出入取結、秀誠代ニ罷成候」（『中野物語』）と述べられていたように、近世になってからは秀意―秀恵―秀山―秀誠と継承されたもののようである。そこで「誠照寺系図」[12] によると、図2のごとくに歴代が記載されているので、この時代あたりの記事からはおおむね信頼してよいものと思われる。

注

① 拙稿「大町専修寺の歴史」（『本願寺史料研究所報』第一六号、一九九六年）。

② 拙稿「横越証誠寺の成立と出雲路亳摂寺」（福井県立鯖江高等学校『研究集録』第一八号、一九九六年）。

③ 『反古裏書』（『真宗史料集成』第二巻・蓮如とその教団）。

④ 「三門徒派専照寺歴代系図」（『真宗史料集成』第七巻、伝記・系図）。

⑤ 『中野物語』（『真宗史料集成』第四巻、専修寺・諸派）。

⑥ 『異本反古裏書』（龍谷大学大宮図書館所蔵、登録番号〇二一―二四七）。

⑦ 拙稿「鯖屋庄と鯖江庄」（福井県立鯖江高等学校『研究集録』第一五号、一九九三年）・同「越前の真宗寺院と親鸞止宿伝説」（『若越郷土研究』第四〇巻四号、一九九五年）。なお小字名については『福井県史』資料編一六下・条里復元図による。

⑧ 「日野一流系図」（『真宗史料集成』第七巻）。

⑨ 「大谷一流諸家系図一―常楽寺系図」（『真宗史料集成』第七巻）。

⑩ 拙稿「横越証誠寺の成立と出雲路亳摂寺」（前注②）。

⑪ 『福井県史』資料編五・中近世三の「誠照寺文書」の解題でも、これら一連の文書に疑問の余地があることが指摘されているが、原本調査の機会が乏しい研究者にとっては、疑問の示唆だけでは不満の残るところである。

⑫ 「誠照寺系図」（『真宗史料集成』第七巻）。

（こいずみ　よしひろ）